



志が生まれるまで Mr. イギリスに渡って、 日本を見つめる。

普通の少年、普通ではない道を志す

体格は周りの子たちより大きい、人を押し回して出るタイプではなく、どちらかといえば無口で引っ込み思案。いつも静かに、にこにこ笑っている。祖母からは「うどの大木」と揶揄されたこともある。そんなどこにでもいそうな穏やかな少年が、10代で日本を離れてイギリスのケンブリッジ大学で学び、同国でいくつもの事業を立ち上げて、特別な人生を送ることになるとは、一体誰が想像しただろうか。

JACグループの取締役最高顧問の田崎忠良は、1943年7月16日に神奈川県横浜市の三ツ沢で生まれる。戦時中は満州に疎開したため幼いときはロシア語が話せたらしいが、ものごころついた頃、忠良はどう見ても普通の少年だった。学業の成績においてもスポーツにおいても普通で、また、取り立ててリーダーシップが秀でているわけでもない。そんな彼がなぜ海外を志したのかと不思議に思うところだが、実は彼の置かれた家庭環境がかなり複雑だった。父親に桁違いの借金があったのだ。忠良の父は軍隊のエリートが行く陸軍中野学校の出身であった。強い使命感を持っており、終戦後に諸外国との国交を回復させたいと私費を投じて世界を駆け回り、その

結果、大きな借金を作ってしまった。忠良はあるとき、その事実を知らされ、借金の大きさに愕然とする。自分がこのまま成長し、東京の大学を出て官僚になったとしても到底返済することはできず、常に、父の負った借金の取り立てに追い回され、お金の不安を抱えながら生きていかなければならない。このまま日本にいては、自分の未来もないと、忠良は考えた。海外の大学で学び、特殊な経歴を持つ人材となることで、より大きな飛躍を目指すのだ。それを叶えれば、父親の借金をすべて返済し、満足な人生を送れるかもしれない。



高校時代の忠良（前列右から3番目）

人生を賭けるのは、イギリスだ

ではどの国で学ぶのが良いだろう。当時、理系が得意な忠良は、大国同士の宇宙開発競争に魅了されていた。その点、ソビエト連邦は、人類初の人工衛星打ち上げや有人宇宙飛行を成功させ、宇宙開発をリードしている。やはりソ連しかない、ロシアへの留学を視野に動き出したが、ソ連大使館に問い合わせると「若すぎる」という理由でやんわり拒否されてしまった。それならばとアメリカ行きを考えてみたが、ピンとこない。アメリカ留学をする人は当時から一定数おり、ほかの人と同じ道を進んでは、特別な人材にはなれないと考えたためだ。そこで次に浮上してきた候補がイギリスだった。もともと西ヨーロッパの盟主として世界をリードしてきたイギリスに興味を持っていたことに加え、運良く東京大学で教鞭をとっていたケンブリッジ大学出身の若いイギリス人講師と出会い、留学の相談に乗ってもらえたこともイギリス行きを具体的に考えるきっかけとなった。彼は忠良に、直接大学には進めないから、まずイギリスでパブリックスクール（私立の寄宿制高校）に通い、そこで好成績を収めて大学を目指すのだと教えてくれた。こうして目標が定まったのである。

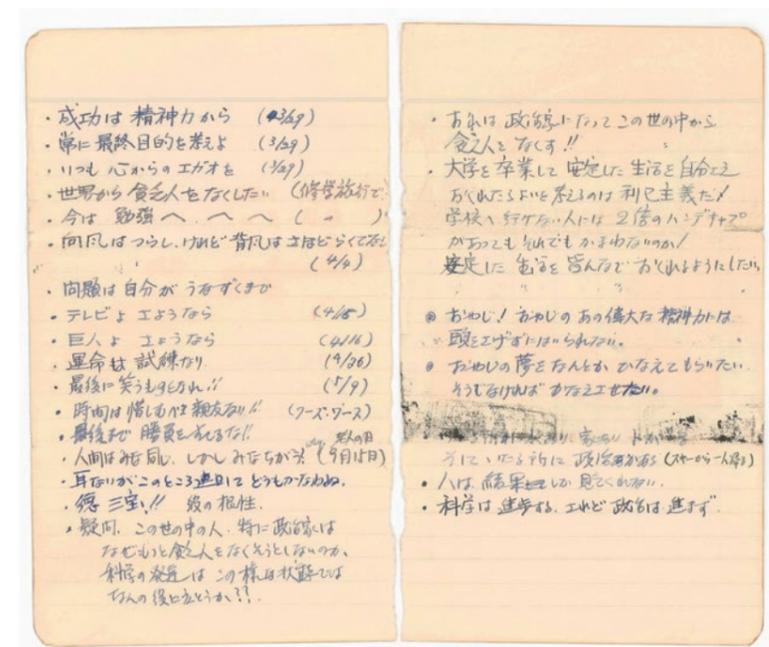
しかしイギリスに留学するためには、まず日本の外務省の英語の試験に合格して実力を示さなければならなかった。英語が得意ではなかった忠良は、必死で勉強する。家族はこのときまだ、忠良の決意を真剣に受け止めていなかった。どんなに頑張っても、さすがに合格はできないだろうと。だが、なんと忠良はここで見事、合格を勝ち取ってきたのだ。この結果に焦ったのは母親だった。「海外に行くのはまだ早い」と猛反対するが、時すでに遅し。忠良の意

志が固く、どうしても覆らないことを知るとさすがに諦め、「日本に還元したいものを見つけてそれを実現するまで帰って来てははいけないよ」と息子を諭す手紙を渡し、送り出してくれた。こうして1962年、都立西高等学校を卒業した秋、19歳の忠良は、イギリスへと飛び立つ。手にしていたのは片道の航空券。母と祖父が金策に駆け回り、渡航費と1年分の学費、滞在費はなんとか工面してくれたが、一切の余分な費用はなく、いつ日本に帰れるともされない旅立ちだった。

信念を貫き通して奇跡を起こす

イギリスの地に着いた忠良に、異国の暮らしを楽しむ余裕はなかった。というのもパブリックスクールは通常2年かけて学び、卒業するのだが、忠良は学費を最小限に抑えるために、1年でパブリックスクールを卒業し、ケンブリッジ大学に進学するという無茶な計画を実行しなければならなかったからだ。もともと英語は得意ではなかったので、日々の授業にもなかなかついていくことができなかった。授業が終わったあとは、授業の予習復習に加え、英語の勉強にも相当の時間を割いた。このとき忠良を奮い立たせたのは、どんな無理であろうと必ずやり通すのだという強い覚悟だった。本気で心を決めた者は、人が驚くような力を発揮することができる。忠良は自分の未来を切り拓くため、文字通り寝る間も惜しんで勉強を続けた。

そしていよいよ、運命のときを迎える。ケンブリッジ大学の入学は3日間にわたって行われ、筆記試験のほかに、面接試験も重要なポイントだった。入学の目的、学びたいこと、将来の目標な



忠良が高校時代に書いたメモ。洗練されたフレーズが書かれている

どについて確認することで、この人材を受け入れるべきかを判断されるのだが、忠良は「英国で学び、何かを日本に還元したいのだ」という日本人としての志を強く訴えた。1964年1月、ケンブリッジ大学からの通知を待ちわびていた忠良のもとに、合格という吉報が届く。忠良は体の底からあふれてくる喜びにふるえた。当時、イギリスの大学進学率がわずか2%だったことを考えると、日本人である忠良が世界最高峰のケンブリッジ大学に入学できたことは、奇跡と言えるほどの確率だった。忠良は自らを信じる強い気持ちを持ち、努力し続けることで、信じられない人生も切り拓くことができることを示したのだった。

イギリスが教えてくれた価値観

ケンブリッジ大学に入学後、忠良はイギリスという国の大きさを知ることになる。大学の総長に面会し、「なぜ自分が入学できたのか」と尋ねたときもそうだった。総長は、成績が良かったことはもちろんだが、と前置きをして話してくれた。「まず日本人の感性をケンブリッジに入れることは、ケンブリッジのためになるのです。そしてあなたは、ここで学ぶことによって日本とイギリスをバックボーンに持つバイカルチャーな人物として世界で活躍することができる。私たちはそういうあなたの経歴を支えることに、大きな価値を感じているのです」。忠良はこの言葉に、目が覚めるような思いがした。日本からやって来た21歳の若者に、権威あるイギリスの大学が期待をしてくれていることがまず素直にうれしかった。そして、イギリス人の真似をしると言うのではなく、日本人としての誇りをもって



ケンブリッジ大学合格を知らせるために忠良が母親へ送った電報

学べと言ってくれている、その大きな考えに打たれたのだった。800年以上の歴史を持つ大学で学ぶというのは、こういうことなのかと感じ入った。

また友人とのやりとりの中にも、イギリスの美しさを感じる。飲み会に誘われ、お金がなくて断ったときのこと。いつの間にか自分の部屋のドアの前に、缶ビールが置いてあった。苦学生であり、娯楽に使うお金がない忠良のことを察し、何も言わずにそっとプレゼントしてくれた友人に感謝するとともに、このような気遣いが自然にできる国が尊く思えた。振り返ってみれば、日本人であることや、英語が上手く話せないこと、お金がないことで、忠良がイギリス人から差別を受けたことは一度もなかった。多様性という言葉がなかった時代から、イギリスは多様性を受け入れ、誰に対してもフェアだった。こうした成熟した国ならではの価値観に触れながら学ぶことは、お金の換算できない大きな価値があると感じた。

パブリックスクール入学のころ(4列目左端)



そして動き始めた、人とは違う人生

ケンブリッジ大学を卒業した忠良は、イギリスの高等教育機関で学びを修めた日本人という稀有な経歴を手にし、ヨーロッパのさまざまな企業から注目され、就職の誘いを受けた。スイスのある企業は、面接のための往復の航空券を手配してくれたし、なかには忠良の大学から借り受けた奨学金を全額返済するという驚きの条件を提示してきた企業もあった。彼が思い描いていた未来がどうとう現実になろうとしているのだ。しかし、忠良はそんな魅力的な誘いを断って、給料面でそれらに及ばない日本企業である三菱商事を就職先を選ぶ。それは、当時ロンドンで三菱商事の役員をしていた諸橋氏(後の三菱商事社長)に、諭されたことがきっかけだった。「日本企業はいま、破竹の勢いで伸びている。キミはいまのことだけ考えて海外の企業に勤めるよりも、将来を見据えて日本の企業を学んだ方がいい」。この忠告に忠良は、なるほどと思った。確かにこれから先の未来に自分がどこで活躍するのかを考えるなら、それは日本企業なのかもしれない。そこで三菱商事への入社を決めた。渡英してくる顧客や要人に同行し、通訳などを行った。この期間はわずか1年程度ではあったが、日本企業の成長の勢いを肌で感じ、彼らが何を求めてイギリスにやってくるのかを知ることができた貴重な期間だった。

三菱商事を1年で退職した忠良は、次に米国企業に就職。先物取引に携わり、アジア初のディーラーとなる。もともと数学が得意で、数字を扱う仕事に向いていたこともあり、独自に相場を把握して好成績を上げることができたため、誰もが皆、忠良の情報を欲しがっ

た。こうした成功体験からも忠良はビジネスの勘所をつかんでいったのである。しかし、この仕事をずっと続けていくとは考えていなかった。かつて母親が手紙に書いてきたように、イギリスで学んだ自分は日本に何かを還元していかなければならない。特別な人材としてのポジションを手に入れたからこそ、ほかの人にはできないことをするのだ。そのためにおそらくは、自分で事業を立ち上げることになるのだろう。ときは1970年代。世界が大きく動きつつある中で、日本とイギリスのバックグラウンドを併せ持つ青年は、これから自分が進むべき道を見定めようとしていた。



三菱商事に勤務していたころ

■ 田崎忠良 PROFILE

1943年横浜に生まれ、満1歳の時に満州に疎開。終戦後、命からがら満5歳の時に引き揚げ船で帰還。東京都立西高等学校を卒業後、19歳で渡英。Bathにある全寮制私立パブリックスクールKingswood Schoolに学び、「Aレベル」で数学と物理、「Sレベル」で高等数学をトップの成績で卒業、1964年に現役でケンブリッジ大学ダウニングカレッジに入学。1967年、同大学の数学・経済学科で学士・修士号を取得し卒業。ダウニングカレッジ初の日本人学士となり、以後同カレッジのフェロー(理事)として現在に至る。

ケンブリッジ大学卒業後の1967年に、三菱商事のロンドン支店に入社。その後、Continental Ore Corp、住友商事のロンドン支店等を経て1974年に独立し、ロンドンで「日本食の輸入・卸」「人材紹介・通訳翻訳」「不動産賃貸」等の事業を発足。現在はJACグループの取締役最高顧問(Founder, Executive Director, and Chief Adviser)を

務める。

2016年には自らの経験に基づき、世界に通用するバイリンガル・バイカルチャーの素養を備えた真のグローバルリーダーの育成に自らの資本を投入し、「Tazaki財団」を設立。日本から毎年7~8名を選出して英国に送り出し、16歳から大学卒業までの5年間の奨学金全額支援を行っている。この長期留学制度の奨学金額は、日本の歴史上、類を見ないもので、同財団卒業生の将来のグローバルな活躍が期待されている。

2022年、日英協会から、当財団設立により今後の日英関係を担う人材の育成に多大な貢献をしていることが評価され、理事長として日英協会賞(The Japan-British Society Awards 2022)を受賞。11月22日の授賞式では、日英協会名誉総裁の彬子女王殿下より記念のシルバープレートが授与された。